

経営のヒント101 自慢するのは未熟な証拠

自慢話は不愉快、失敗談を聞くのは楽しい！

人が自慢話をするのを聞くのは不愉快な気分になる。

自慢するのは、自分の優れている点を人が認めてくれないと思っていたり、自分が立派なことをしたのに人が知らないと思っているからである。

すなわち劣等感があるからにはかならない。

誰もが自分について正しい認識を持っていてくれるという自信があれば、自慢などする必要もない。

もし、人に知ってもらいたいことがあっても、その内容が誇るべきものであればあるほど自分から宣伝するべきでない。

自分で言えばその価値が下がるものです。

自分の優れた点は、人が見つけてくれてこそ、価値が大になるのです。

いずれにしても、立派なことをしていれば、人の目にもつくから自分で言う必要もないし、日常茶飯事だから自慢の種にもならなくなる。

又、常に上を目指して努力しているときは自慢する暇などない。

自分の現在の能力や業績に対して満足していないので恥ずかしく思っている。

まだ自分の努力が足りないと自分を励ましている状態である。

自慢は芸の行き止まり、ということわざがありますが、自慢するようになったら、もうそれ以上に上手になることはないのである。

自慢したくなったら、自分がまだ至らないのだという点を反省し、自慢は自分の品格を落とし、人に馬鹿にされ、それに人を不愉快な気分させる以外の効果は期待できない点を思うべきである。

一方、人の失敗談は何度聞いても、面白いし、楽しい。

聞いている人が優越感を感じることができるので、本当は自分の失敗談を面白おかしく話せるということは、それだけの自信があるからにはかならない。

できる人は、「謙虚」です。

そして「真摯」でもあります。

現状に甘んじることなく、まだまだ理想の姿を目指す。

<経営のヒント>

「自慢話は未熟な証拠」

本当の意味で、誰も認めてくれないから、認めて下さい！」と言っていることと同じ。

自慢すると、品格が下がる！

謙虚に、そして真摯に。

ありがたいですね。

すると周りが自然に認めてくれるものです。